

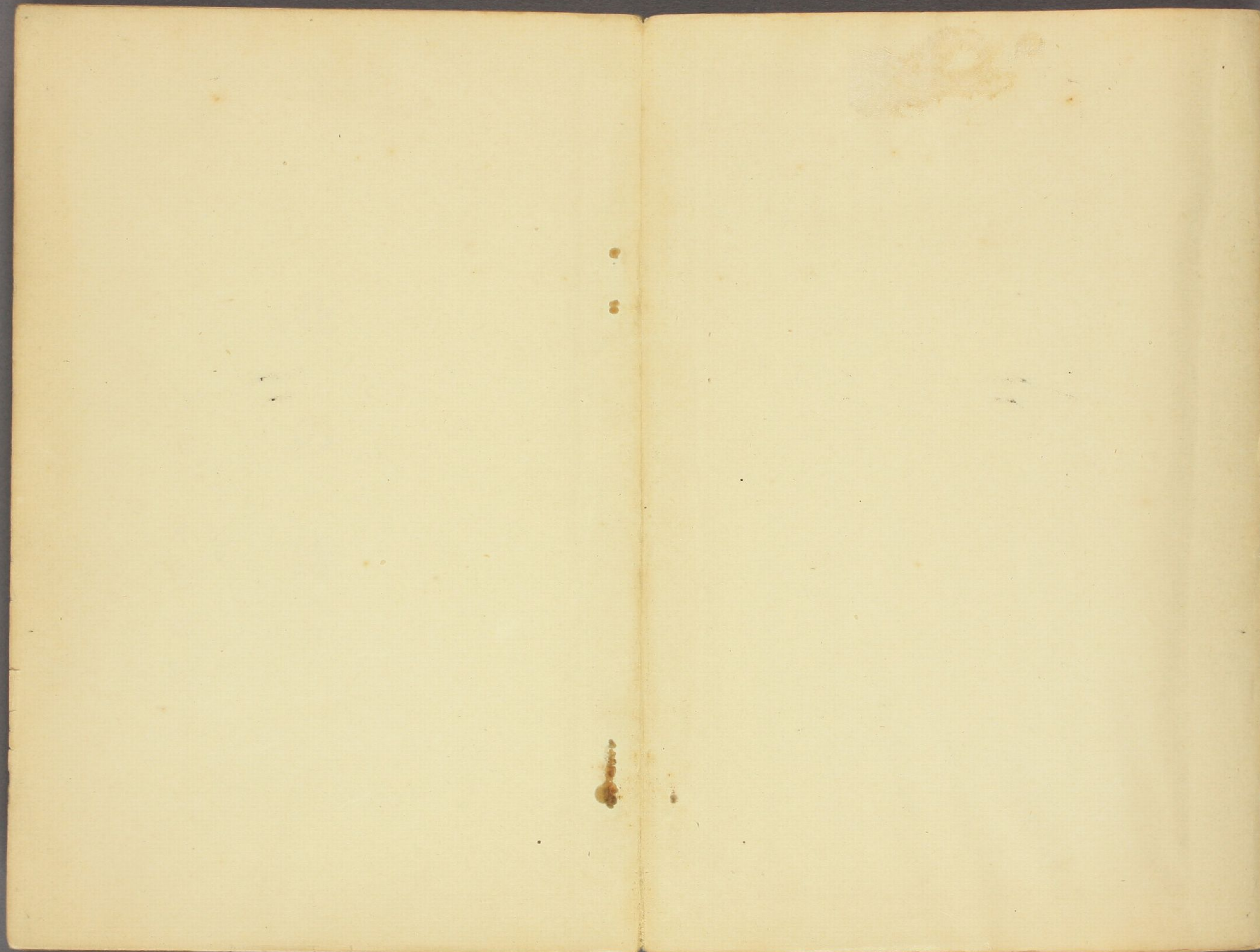
花の詩

文學士小原無絃譯









花
の
詩

文學士 小原無絃 譯

われなんぢらに告つげんソロモンの榮華はいぐわの極きはみの時ときだにも其装そのよそほひの
花はなのひさつに及しかざりき

神かみは今日野けふのに在ありて明日爐あすのに投入なげいれらるゝ草くさをも如此かくよそはせ
給たまへば況まして爾曹なんぢらをや嗚呼あゝしんかう信仰しんかううすき者ものよ

Flower in the crannied wall,
 I pluck you out of the crannies,
 I hold you here, root and all,
 in my hand,
 Little flower——but *if* I could
 understand
 What you are, root and all, and
 all in all,
 I should know what God and
 man is,
 ——Tennyson.——

んるべ前にと譯には五花
 こときの謝な筆し泰篇の
 と共も作すし例も西卷詩
 をにの大方所る依ら學に收
 期深くや君子なり罪てる繡語と
 將益生の睡唱の低は難べくも及る
 來來の棄に至るか玉信す禪答を添へ低
 向の惡にだりて在天のてなり。き
 つ筆不もては五の詩瓦り。き
 て刻才値せさる年星礫

夕千鳥の君に

げにや、贈酬そのものに乏しからずと雖も、至
美絶妙、心魂を動かすこと花に若くなし。女王
も之を臣隷に賜ひ、劣臣賤隷もなほ之を帝王
に捧ぐ。
花は古今を通じて國民性を表彰し、あらゆる
感情を誓約す。幼童は之を手にして嬉戯する
間に、その紅葩白瓣によりておのづから美の
觀念を會得し、戀の甘きに酔へる才子佳人は
かたみに之を贈り、新婦は之を胸間に裝ひ、人
はまたその忘れ難き逝者に之を手向く。王家
も之を紋章とし、國民も之を徽號とす。あい、花

の人心に於ける絶大無邊と謂ふべきかな。
 節あだかも冴寒、花いまだ開かずたとひ之あ
 りとするも都門塵埃裡のものを呈するに堪
 へず、すなはち、燕譯花の詩一卷を送つて之に
 代ふ。たゞ微香幽色の露だになきを愧づるこ
 と更に切なり。

明治卅九年早春

東部七のぶが岡のうら蔭にて

無絃生

花の詩目次

春の聲	ヒーマンス夫人……………一
頌春歌	コロンサオール……………七
浮燈と花	グーテ……………一一
百合花	ユールリッヂ……………二三
最後の夏暮暮	ムーア……………二四
いざや菫の	コロンウオール……………二七
櫻草に與ふ	ヘリック……………二九
菫の花束	シエレー……………三三

金銀花	ロセツチ……………三四
花 墓	グリーテ……………三六
記念の花蓋藪	アラウニング夫人……………三九
水仙花	ウラーツチリス……………四八
柳	シエクスピア……………五一
春の雨	ヒーマンス夫人……………五三
山雛菊に與ふ	バーンス……………五六
モツスガール	ウラーツチリス……………六四
薔薇と墓	ユーゴ……………六七
向日葵	トムソン……………七〇

續隨子	ロセツチ……………七一
歌	グレン……………七五
おゝ我妹子	バーンス……………七七
星と蓮	ホルムス……………八〇
薔 薇	スコット……………八七
水仙花に與ふ	ヘリック……………八八
かへし	ウーランド……………九一
柳	バイロン卿……………九二
あせたる墓に	シエレー……………九五
百合の花	レイ、ハント……………九七

雪の花	ロビンソン夫人	一〇〇
月見草	キーツ	一〇二
人里遠く	パトンス	一〇三
水仙草	クーパー	一〇六
○	エリザ、クロク	一〇八
雛菊に與ふ	ウォーリツチアス	一一〇
白薔薇	カラ、スミス	一一七
ふる里	ユールリツヂ	一二一
花に與ふ	作者不詳	一二三
春 静	ウィラント	一二六

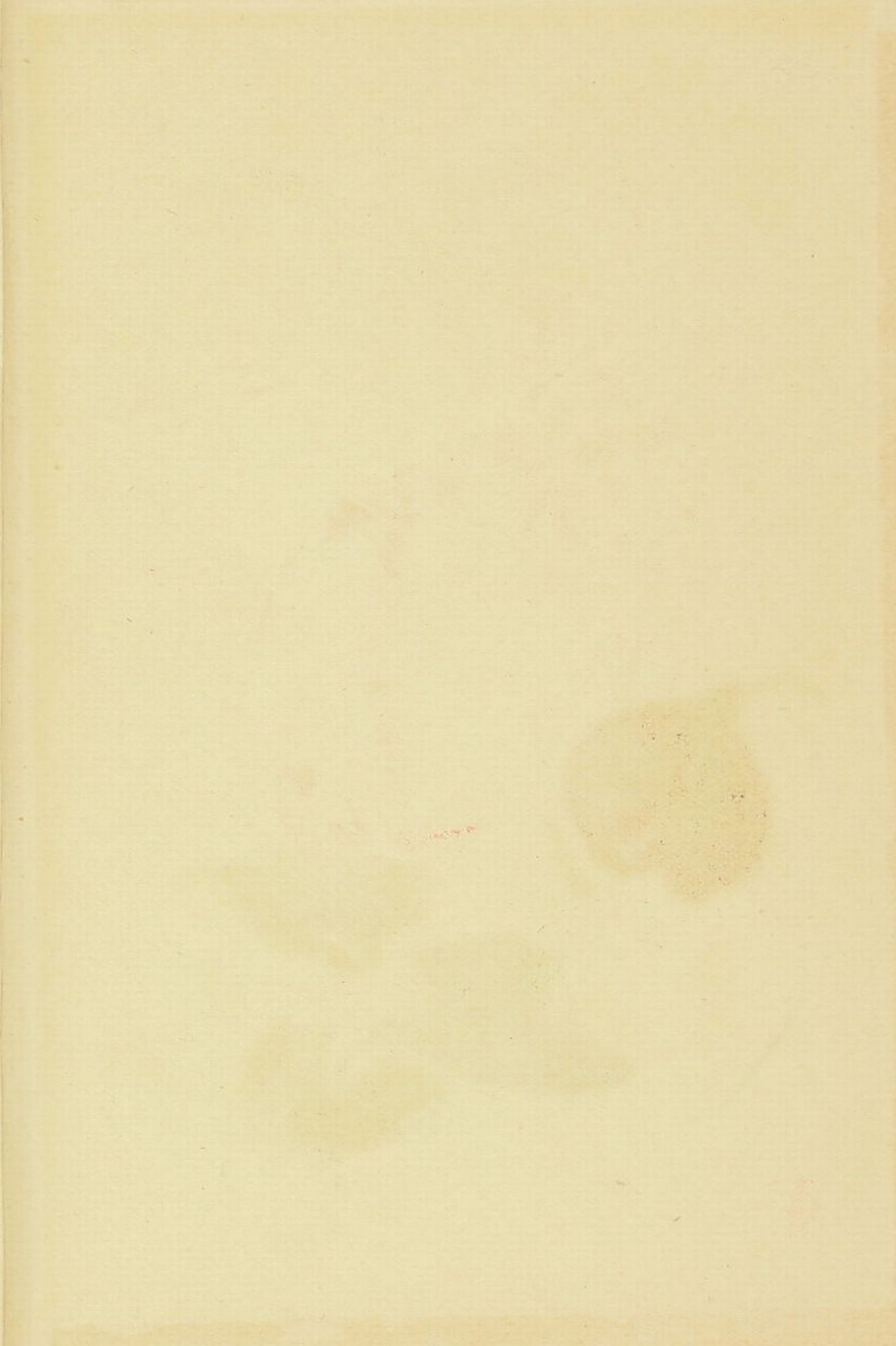
月見草	ハンター夫人	一二八
花 薔薇	コールリツヂ	一三一
低 唱 目 次		
芙蓉怨		一三五
花の怨		一四二
落花		一四四
白芙蓉		一四六
行 春		一四八
星と花		一五〇
野 菊		一五四



附録 花語策 花問答

花の詩目次終

川原の秋	一五六
梅の小家	一五八
花賣る子	一六二
まほろし	一六五
君よ	一六七
野菊	一六〇
夕野	一七一
若き恋	一七六



花の詩

川原無紋譯

春の聲 (ロマンズ夫人)

われ來ぬ、われ來ぬ、汝等の呼べるに
光と歌もて山々越ね來ぬ。
菫の萌ゆるを告ぐる風あり、
草間に星なす櫻草あり、

足元あしもとにひらくみどり葉はあれば、
覺おぼむる野のを行くわれは知れなむ。

われ、南方に吹けば、花栗
森の木々より雨なし落ちぬ。
ふりし墳ふみ壁かべ頽たふれし寺は
伊太利野もせの花に掩おほはれぬ。
さもあれ、春ぞ。廢やぶ趾あし塚つかを
語るもわれの知らざるところ。

われ、風強き北方を過ぐれば、
落おち葉は松まつたわゝ枝えださしかはし、
海うみ人ひと長閑ながいなる海うみのもにあり。
馴鹿なづか、牧まきをはしりめぐりつ、
松まつ、若わみどり房ふらをば垂れつ、
足あしふるゝ處ところ、苔こけもかゝやく。

われ、森の路に軽くうそぶけば、
風かぜあたゝかきへスベリアの森
星月夜せいげつやすがら啼なく鶯うすより、

くろき 椏の枝、芽ぐむころほひ、
氷島の湖に叫ぶ鵝鳥まで
聲てふ聲は碧空にひらく。

四

細流、泉より鎮はなてば、
銀色 燦たる大洋をば指して、
崖、峽よりひかり落ちつゝ、
森の木の葉に飛沫かけつゝ、
そば立つ岩を噛みつゝ、行いて
波のよろこび地ぞ傳ふる。

いざ來よ、あはれ、快樂の兒等よ。
董の床を今家とせよ。
薔薇の頬、露の眼もつ兒等よ。

小琴、花束、歌の譜さげて、
われに逢はんと小跳りしつゝ、
日南に出でよ、わが行かぬ間に。

なやめる人の家より遠く、
森に、谷間に水こそひかれ。

五

けがれし屋より、竈より遠く、
風のまに、若葉をどりて、
小莖は森の歌にぞふるふ。
あゝ、「青春」はわが領にあり。

頌春歌 (コーンツォール)

風そよくと
花薔薇吹いて、
薫りみちたる
野に牛鳴いて、
水なめらかに
流れがやく。
汝がためならじ、わがためならじ。

ひとりの人ひとりのの豈なためならんや。八
風かろらかに吹くもこれ、
牛うしたのしげに鳴くもこれ、
水みづうれしげに行くもこれ、
あゝ、森羅しんら萬象ばんしやうのためなれや。
あはれ、「み春」よ。慈悲じいの「み春」よ。
あゝ、森羅しんら萬象ばんしやうを照らし笑わらむかな。

羊ひつねはいづら、
富者ふぢやうの沼ぬまに。

眠ねむ睡りはいづら、
貧者ひんぢやうの床とこに。
農夫のうとの泣なみくも、
君きみのしのぶも、
人の力ちからの曲まがり得えぬ運命さだめ。
さはれ、「み春」のなし得えぬあらし。
「み春」はうらゝ日ひを送おくり、
「み春」は妙たみの花はなを織おり、
「み春」は園うゑを装まふなり。
あゝ、森羅しんら萬象ばんしやうのためなれや。

あはれ「み春」よ。慈悲の「み春」よ。
あゝ、森羅万象を照らし笑むかな。

俘虜と花

(ゲーテ)

奇しくも妙の花ひとつ、
心は切にしたへども、
尋ね行かまく儘ならぬ
わが俘虜の身を奈何ん。
思へばかなし、あゝかなし、
昔は足に桎梏もなく、

心のまゝに摘みも得き。
ふりさけみれば遠方遙か、
高塔空に聳ゆれど、
牢屋の壁の高うして、
その花つひに眼に入らず、
その花贈る人あらば、
衛士、武夫のわかちなく
まことの友とわれ呼ばむ。

薔薇

君がほとりに咲くわれは
君があはれのさまを知る。
たかき幸なき武夫よ。
われ薔薇をば戀ふや、君。
清きみ胸の心こそ、
花の女王とゆるさるゝ
わが臨むべき傾なれや。

侍 虜
緑衣まとへる汝が紅き

蕾ぞわれも
黄金の美玉の照る如き
少女の眼はいや愛でむ
汝の花環はうつくしき
額を飾れど、しかすがに
わが戀ふる花は汝れならじ

ちさき薔薇ぞほこりに
ぬき出て常にそよぐなる

薔薇の花環つけずとも
花嫁みなが持つもわれ
君がみ胸を搏つもわれ
あゝ君忠實に淨ければ
百合花讀へざることなけむ

直く、潔けく自を持ちて
卑き慾念はいだかじよ
さはれ、牢屋にとらはれの

さびし、悲しく日を透る。
浄く麗なる女子のごと
汝れ等は白く装ほへど、
わが戀ふる花は別にあり。

石竹 石竹
君が擇る花われならむ、
さらすば園丁われのみ
心くばりて土かはじ。

花を飾りて葉はしげく、
とはに薫する香は甘く、
色それく佳からずや。

園丁が愛づる花なるに、
たれ石竹をさげすまん。
日南に鉢を移しては、
やがて日影に守るなり。
さはれ、あねかに照り榮わて

われ喜ばすふしもなし。
わが戀ふる花はいとちさし。

董花
小草がくれに身をひそめ、
物言ふことは好まねど、
今ぞ、はじめてならはしの
沈黙やぶりてこと問ふよ。
やさしき人よ、み心の
ねがへる花のわれならば

かをりも高く咲き出でむ。

俘虜

しかく、やさしく情ある
董花をわれはうやまふよ。
甘き薫りはわが傷む
心なぐさめくるゝなり
汝れにぞわれは打明けむ
こゝ、石寒きあらにはに
わが戀ふる人はあらねども、

かなた細流の岸ちかく
わびてさまよふ忠實妻は
わがとらはれてある限り、
心をこめてこゝを看む。
青き小花を碎きては
ひとりごつべし『忘れな』と。
遠く隔かれどしか覺ゆ、
さりや、隔かるもいと忠實の
愛は二人を結ぶとぞ。
されば、牢獄の夜半にだに

命ながらへわれぞある。
宿世思へば、あゝ、つらく、
たゞ叫ぶらく『忘れな』と。
かくて新生朝かへる。

百合花

(ヨーロッパ)

ルミンの花咲く谷を
行く水のさやぎ静かや。
露たもみ、白百合泣いて
ゆらぐかな、風のまに〜。

『やすみなき風よ、吹かざれ。
歎かひて夢をな障ねそ。』

わが春の時こそ、はやき
羽張りて飛びつゝあなれ。

『わが満開おそくも見てし
旅人の明日立ちかへり、
ルミンのさびしき谷を
いたづらに見渡すらんや。』

最後の夏薔薇 (ムーン)

これ、ひとり咲きのこりたる
夏薔薇のをはりの花よ。
むつびてしその友垣も
今はみな凋れはてたり。
はらかならの花だにあらず、
くれなるを照さんずるも、
かなしみを分たんずるも、

あたりには蕾もあらず。
汝れひとり梢に瘦せて
のこれるをわれ見棄てんや。
らふたげの花はねむりぬ、
いざ汝れも共にねむれよ。
園生なる汝が友みなが
薫りなく朽ちて臥したる
ふしどにぞ、われことさらに
汝が葉をば撒きちらすなる。

友情のはやくも消ねて、
愛の照る範圍より、玉の
はかなくも散ることあらば、
忠實の胸ひちに塗れて、
戀ふる人去ることあらば、
やよ、われも共に行くべし。
お、誰か、この寒き世に
たゞひとり棲むをねがはん。

いざや董の (コーンウキール)

いざや、董の萌ねそめし
春野をさしていざ行かな。
さゝ川渡り、雪踏みて
うら懐かしき、懐かしき
董の咲ける野をさして
手に手をとりにていざ行かな。

うら懐かしき花かをる
そこ、うつくしき南野の
夕榮、ほゆる空の下、
汝れ、懐かしう歌へかし、
よしや、董は枯るゝとも、
戀とこしへにかはらじど。

朝露 櫻草に與ふ (ヘリック)

愛兒よ、などさは涙垂るゝ。
白露、玉なす清きあした、
汝れ等は生れたり、何を傷む。
傷むがゆゑなる涙なりや。
百花、そこなふ強き雨も、
千草を吹き折る猛き風も
汝れ等はうけたることもなけむ。

將又おとろへ老いしならず。
汝れ等は、今なほいとわかし。
將又浮世の人の如く、
汝れ等はひがめる者にあらず。
然るを何ぞや、みなし兒等に
似たるもあはれや、美しき花の
譬は、舌なほうごかざるに、
涙を垂れつゝ、傷む見ては
ひそかに、惟しと心まどふ。

語れや、愛兒よ、櫻草よ、
うなだれ涙にむせぶ花よ、
汝れ等がうら泣くゆゑを語れ。
あゝ、そも睡眠の足らぬためか、
うれしき子守歌なきがためか、
董のすがたを見ざるためか、
戀ひ戀ふ男女の心むすぶ
ねにし、の絆とならぬためか、
いなく、汝れ等はかゝるゆゑに
涙を垂れつゝ、泣くにあらず、

みづから傷みて泣くにあらず、
さりやな、傷みて泣くにあらず、
大なる、小なる、尊き、卑き
あらゆる此世の事物はすべて
艱難辛苦を経てぞなると
われ等に論さんための涙。

堇の花束

(シユレ)

ひとゝせの熟睡をへて、
花すみれ野べに咲きたり。
海に、空に、山に、林に
もの皆はよみがへりたり。
もの皆をうごかし、つくる
ふたつとは生命よ、愛よ。

金銀花

(ロゼツチ)

からたちの棘トゲ鋭トギきキ墻カキの
小高きをかからくも攀トグぢつ、
にごり江カハに足をけがしつ、
きづついで摘トグみし金キン銀ダ花ハナ。
棘トゲに瘦ヤせ、風カゼにやつれし
その花ハナを手テにとり持ちて、
いとゆかし、美ウツクしと思オモひぬ。

いやしげき叢トグとめ行ユクけば、
はぐくみのまじらひ安く、
花ハナたわゝ、匂ニホひ亂マれて
香カと露ツキの神カミ燈ヒさながら、
やつれしは一つもなきに
手テなる花ハナなげしも、さはれ、
又またさらに摘トグみも得エざりき。

花 董 (ゲータ)

野べのみどりの草がくれ、
ひともと董、花咲きぬ、
げに懐かしの花なれや。
小跳りしつゝ、たのしげに
牧の少女、その径を
歌うたひつゝ、野を越えて、
いや近うこそ来りけれ。

董思ひぬ、あゝ、われに
優らむ花のなかれかし、
さははれ、はかなし、わが生命。
かの親しげの少女、子ぞ
わが花摘みてやさしくも
その胸の上、に挿めかし、
あゝ、もどかし、の束の間や。

眼を莖に觸れもせず、
あはれ、小さき花ふみぬ。
花はふまれて泣かざりき。
せめては、われの死ぬるとも、
少女のそばに死にたまし、
その足もとに死にてまし。

紀念の薔薇花

(フランチニング夫人)

お、薔薇よ、誰か汝れをば
花なりと知るものあらむ。
くれなるの色今あせて、
艶もなく、匂ひもあらじ、
たい蒼うひからび果て、
葉よりもいやかたげなり

七歳を筐に秘められ
女王てふ名にも恥ぢずや。

二
微風の吹きぞなれつる。
積殻の棘いとしげき
かきの間の汝れを渡りて、
永き日の暮るゝも消ぬ
薫りもて小徑こめしを、
あなあはれ、その微風の

よしや今、汝れを吹くとも、
つれなくぞ見棄て去るべし。

三

天つ日の照しぞなれつる。
榮光をば汝が麗はしの
花深ういやもまじわて、
花や燃ね、日光や咲くを、
心あてのあやまたれしを、
あなあはれ、その天つ日の

よしや今、汝れに照すとも
あやなくぞ輝かすべき。

四

朝露の(置きぞなれつる)
汝が花をうるほさまで、
臙脂べにふくむひびにたけばか、
はじめこそ白けれ、やがて
くれなるに變り行きしを、
あなあはれ、その朝露の

よしや今、汝れにたくとも
たくどころ、黒みわたらむ。

五

蒼蠅あはれの(降りぞなれつる)
汝が上をよしととめ来て、
ひるの目のひなた戀ひつゝ、
葉の清きへりをつたうて
いとほそ織ほそき足のばしゝを、
あなあはれ、その蒼蠅の

よしや今汝れに降りんも
ひや、かに飛びや去るべし。
四四

六

密蜂の(啜ひぞなれつる)
花深う汝れに啜うては
かぐはしの琥珀蜂房につみ、
たのしさに心もうつゝ、
蕊の香にひたも酔ひしを
あなあはれ、その密蜂の

よしや今、汝れを認むども
かりそめに見てや去るべし。

七

たゞひとり、心は汝れを
花薔薇と見とめ得るなり。
かくまで色香もあせて
汝が姿かはりはてしも、
心のみ、さはさりながら
めでたしと汝れをばにほひ、
四五

うつくしと汝れをばながめ、
またしと汝れをば定む。
四六

八

あゝさりや、枯れたる薔薇よ、
この心、汝れをぞ愛づる、
舞踏るとき、ジュリアが胸に
さし挿むるまひも寒きを
ほこりかのかの花薔薇を
今もなほ忘れはてねど、

それよりも汝れをぞ愛づる、
あゝ、心、汝れにぞ傷む。

水仙花

(ウチーツチー)

谷に浮べる雲のごと、
わがうらぶれの逍遙や。
ふと眼に入りしひとむらの
黄金まばゆき水仙花。
湖のほとりに、木のかげに
風そよ吹けば跳るなり。

天の川原にほの見ゆる
星とついで光りつゝ、
入江の岸にはてもなく、
延びたる千々の百千々の
花うち見ればたのしげに
頭ふりつゝ、跳るなり。

波もきらめき跳れども、
花にまされる興あらじ。
さるたのしげの群に入り

な
ど
詩
人
の
傷
む
べ
き。
ひ
た
も
見
守
り、
見
守
り
て、
わ
れ
と
わ
が
身
を
忘
じ
た
り。

心
む
な
し
く
ぬ
る
と
き
も、
心
か
な
し
く
ぬ
る
と
き
も、
あ
ゝ、
ひ
と
り
居
の
恵
な
る
心
の
眼
に
花
は
照
り、
心
快
楽
に
充
た
さ
れ
て、
と
も
に
跳
る
よ、
水
仙
花。

柳
(シユクスピア)

わ
が
垂
乳
根
は
パ
ー
バ
ラ
と
呼
ぶ
少
女
子
を
も
ち
た
り
き。
少
女
は
戀
に
ま
よ
ひ
け
り。
そ
の
迷
ひ
た
る
愛
を
と
こ
は
妹
く
る
へ
り
と
棄
て
去
り
ぬ。
妹
に
柳
の
歌
あ
り
き。
そ
は
い
と
古
き
歌
な
れ
ど、

妹が薄命をつくしたり。
あゝ、その妹はその歌を
歌ひながらに死にてけり。

春の雨

(ローマンス夫人)

春の涙はきら〜と
枝なる花に玉とたき、
瑞葉みどりに、花あかく
雨を帯びつゝ、かゝやくよ。
くもれる空に麗はしく
虹こそ高く懸るなれ。

見よや、御空の七な彩いろの
消きねなんとして明あけし。

見渡すかぎり美うしく、
いや明あけし、野のみどり。
花の女神もゑまひつゝ、
春の雨をぞ祝ふなる。

かなた、谷より吹き來る
風ひやゝに、かぐはしや。

あゝ、谷の花さはやかに
泉のへにやほゝゑめる。

仰げ、御空に雲もなく、
清くぞ晴れてたゞ青き。
時や、しづかに、長閑なり。
ゆかしや、かをる春の雨。

山雛菊に與ふ (パインズ)

一千七百八十六年四月、その
ひともとを紹き覆しければ

葩ひらの尖ほ眞紅しんくのやさし小花よ、
凶まがつ日、爾なれこそわれに逢ひたれ。
あはれや、かほそき爾なが莖、われは
塵けが埃れのまがひに碎き去るをや、

あゝ今、爾なれをば救はんずるも
かなしや、すべなし、麗はし珠よ、

二

紫立つなる東へ向ひ、
會釋をせましと小跳りしつゝ
まだらの小胸を露にそぼちて
爾なれにぞ叩うな頭づくかの懐なつかしの
隣ごな人りよ、ふさへる爾なれが友なる
美うまし雲雀も今はあらしよ。

三
あゝ、爾なが卑いやしき出うま生れはやう
北風か噛かむごと、寒かう吹きしも、
嵐あのすさむをいと嬉たのしげに
爾なはそれ、あたりに輝きらき映はねつ、
辛あくも親おなる地ち、擡たき出いでよ
かよはき姿すがたを支たねたりしよ。

四

園その生がの美う花はは誇たかれど、高たかき
木き立たよ、眞ま壁かよ、圍かこみ守まもれるに
爾なれたたい塊つら石いむら立たてる
みだれの陰かげ占おめ、收あ獲となき田の、
刈かりたるあをば獨ひとり飾かれど、
眼まなことめて興きようがる人もあらじよ。

五
さもあれ、質つ素すの衣きうち纏まとひ、
雪ゆきなす胸むねをば日ひにくくつろげて

卑しき装ひいとゆかしく
ほこらず、頭を低う上げしを、
あゝ、今『鋤の刃』爾が床かへし、
爾はそれあねなう地に伏したり。

六

かゝるぞ、野の蔭ゆかしき花の
忠實なる少女の運命なるかな。
をこの心をそらだのめつゝ、
ひた戀ひ焦がれて、果なかづくに

はかなう爾がごと、泥に塗れて
けがれの底にぞ埋もれ了る。

七

かゝるぞ、幸なや、人生の太洋かづく
よなれぬ詩人の運命なるかな。
くはしき智慧をばいだきながらも、
海の圖、案ずるわざをも知らず、
つひには濤立ち、風吹きくるひ、
空しく千尋に沈み果つるよ。

八
かゝらむ運命は欠乏、悲哀に
さからふ幸なの人にぞ降る。
浮世のさかしら、誇耀によりて
うらみの淵邊に追ひつめられつ、
『皇天』は知らねど、あらゆる阻礙に
敗れて藻屑と淪み去るよ。

九

『雛菊』の運命をいたむいましも
忽ちひとしき運命に會はむ。
『破壊』の鋤の刃いとほこりに
こゝろないましの花盛を驅らば
おもたき畦路におしつぶされて
果てむぞ、いませしが薄命なるべき。

モッスヂール (ウチーツチース)

『かしここそ』語る童あらはのほこりかに
指ささす方に隠ほの見みねて、
木蔭きかげにひくき伏ふせ屋やあり、
『モッスヂールの畑地なれ、
あはれ、バールンスが雛菊を
あやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまりあやまり』
廣野はのびて海に沿ひ、

アランの峰は海雲を
抽ひいてかすかに聳たねたり。
童の告つげしひと言ことに
静しずけき御空、地、海の
浮うびをどるを覺おぼねたり。

花百千々の雛菊は
雲雀の巢をば閉とぢ籠かめて、
『つちくれ、石のむら立たてる
みだれの陰かげに』炫はねてしも、

散りてあとなき眺めかな。
歌と愛とのあはかなる
魔力を人に知らせんと、
つれなき鋤の刃にかゝり、
枯れし『花』こそよかりけれ。

薔薇と墓 (ユキヨ)

墓ぞ薔薇に語りける――
『あはれ、薔薇よ、戀の花、
露けき朝の汝が上に
そゞぐ涙は何處行く。』

薔薇ぞ墓に語りける――
『あはれ、語れよ、たゞ、墓よ、

日ごと消ね去り、汝が底に
入るその魂は何處行く。

六八

薔薇ぞ答へぬ、『あなあはれ、
荒れてさびしき冢石よ、
われはゆかしの薫りをば
その涙より醸すなり。』

墓ぞ答へぬ、『耀やける
くれなる妙の、おゝ花よ、

とめ來る魂ゆ光明の、
天使をわれつくるなり。』

六九

向日葵 (トムソン)

天つ日のあての侍サマ女メか、
日落つればうら悲しげに
夜もすがら頭を垂れて、
色黄なる葉をば閉づるよ。
日出づれば見るも戀しき
胸ひろげひかりにむかふ。

續ウレドスバシテ隨シ子コ (ロセツチ)

風吹きほそり、
風しづまりつ、
樹より、丘より
そよとだに來ず、
風のまにく
われさまよひつ、
風しづまりつ、

われも坐りつ。

額かぶれのづから

今し、なげきも

髪たゞ長う
くちびる漏れず。

聴くとしもなく、

鐘を聞くなり。

看るとしもなく
眼に入りたるは

くさむらなせる
名もなき草の

蔭に日をよけ、
三つ盃と

咲き出でたりな、
續ウレ随ス子チ。

愁ひ、悲み

盡き極まれば

智恵も、記憶も

わうなきものよ。

時經し今も

それと知れるは

おもかげ去らぬ

續ワ随ス子テ。

歌 (ケレ)

別ワ離レにのぞみ郎は誓へり、

春來ぬさきにかへり來べしと。

あはれ、堇の花も咲きたり。

薔薇の枝に蕾みちたり。

御空に高く揚るは雲雀。

調シラゆかしく啼くは鶯。

ものうき調、不時の縁よ。
あゝ、など時の去ること疾き。
西風吹くも、大空澄むも、
冬は昔と過ぎにしものを。
やよ、疑ひよ、怖れよ、消ねて
戀しき人の名譽思へよ。

あゝ、我妹子 (パインズ)

あゝ、我妹子や、春むらさきの
紫丁香花と匂ひ咲きなば、
われ、飛びかひに小翼倦んじて
蔭に隠るゝ鳥とならめや。
荒き秋ゆる、暴き冬ゆる、
凋れ去りなば、いたみは切よ、

さ はれ、五 月 に 又 咲 き 出 れ ば
わ れ、羽 ふ り て 啼 き さ へ づ ら め。 七 八

あ、我 妹 子 や、城 の 壁 なる
紅 濃 き 薔 薇 と 咲 き 薫 り な ば、
わ れ、美 し き 花 の 胸 と め、
こ ぼ れ て 落 つ る 露 と な ら め や。

あ、そ こ に し て 語 り 得 ぬ ほど、
わ れ は 夜 す が ら 美 夢 た の し み、

日 光、わ に ろ と さ し そ ふ 迄 も、
絹 軟 花 萼 の 底 に 眠 ら め。

星と蓮

(ホルムス)

黄金まばゆき御座より
 「日」はたまりまして静かなる
 海原ふかく伏し給ひ、
 「蓮」ははやも睡むしとや、
 孺子なす葉をばみな閉ぢぬ。
 何をか「蓮」ゆめむらむ。
 など青波のゆらぐらむ。

見よ、見よ、「蓮」よそほひの
 麗はしき眼をひらくなり、
 その白き葉のひかるなり。

うごかぬ水の岸に倚り
 「薔薇」燃ゆる頬を冷やすなり
 「蓮」きよらの麗はしき
 姉妹おほくもてるなり、
 その姉妹はみな「薔薇」に
 かしづかましと願へども、

「薔薇」は「蓮」をいと愛で、
忠實ならましと思ふなり。
「蓮」はうげの眼を開き
青き御空を仰ぐかな。

記せよ、おろかの女子よ、
やがて色香の消ね失せて、
をとめ姿のたとりはど
たれ花嫁と讃へんや。
『あはれや、薔薇』は老い果て、

棘いとしげく寒げなり、
そのうへ地に住ふなり。
さもあれ、星は麗はしう
天つ御空に住ふなり、
わが花簪としてましや。
さはれ、おどろの雲出で、
しろがねなせる海の面を
かき乱しなば如何ならむ、
「星」など遠き御空より

眼を見ひらきて汝が如き
 ものに微笑をそゝがんや。
 あはれ、「蓮」よ、御座より
 光ひとすぢおくらんや。
 風吹きくるひ浪荒れて
 汝れのみひこり残るべし。
 うつろひ易き微笑もて
 天なる「星」のてらさゝる、
 心あだなる光もて

天なる「星」のぬくめざる、
 木の葉は高き峰になく、
 夕べの露もはたあらし。
 濱に黄金の砂はなく、
 眞珠は青き水よなし。
 さはれ、ながれに漂へる
 白き花には忠實ならじ。
 さはれ、「蓮」よ、心せず、
 御空を高く仰ぎつゝ

胸を披いて、うちふるふ
「星」の光に向ひけり。
たちまち雲はひろごりて
暗くなりたる大空と
ひろき水とを封したり。
「蓮」むなく、ふる雨に
仰げごつひに甲斐もなく
さはぐ浪間にしづみけるかな。

薔薇 (スコット)

あたらしう咲き出でんずる薔薇美しくし。
おそれより明けはなれたる希望麗はし。
朝露にきよめられたる薔薇懐かし。
涙もて薫り充てたる戀ぞ戀しき。

水仙花に與ふ (ヘリツク)

あゝ、麗はしや、水仙花。
豊榮のぼる朝日子の
なほひむがしに懸れるに
はやも競うて褪せ行くを
見るには堪へぬ涙かな。
ひま行く駒の疾しや、日の
夕ぐれ歌のひいくまで、

あはれ、停れよ、散らざれな、
共に祈禱をなしたへて
野の逍遙に出で立たむ。

人のこの世にあるはなほ
汝れにひとしく永からず、
春ひととき命かな。
さかり短かく朽ち行くは
汝れのみならず物皆も、
もれぬならひの世なりけり。

時去り來れば人も死に、
雨の夏日におけるごと、
朝にく露の玉のごと
かはき果ててはあともなし。

かへし (カーランド)

君がやさ手にそと摘みて
たくり賜ひし薔薇の花
あはれ、故郷をや戀ひ死にし、
ゆふべを待たではや凋れつ、
その魂ちさき歌となり
君がもとにぞ今かへり行く。

柳 (バイロン)

われ等バベルの河のほとりに
坐りて、遠きむかしを思ひ、
潜然として涙ながしぬ。
あゝ、そのむかしわれ等の敵は
殺戮のさけび高く揚げて、
サレムの宮を奪ひ去りしに、
あはれ、家居をもたぬ女子等は

泣くく四方に迷ひ行きしよ。

愁に堪へず、河を望めば
悠々として水流れ去る。
彼れ若し歌をもとむるとても、
あはれ、途行く人いづくんぞ
かの勝利をば知ることあらんや。
敵よろこばす爲めにと高さ
琴を弾かんか、この右の手は
忽ち朽ちて永久に癒わされ。

柳の枝に琴は懸れり。
あはれ、サレムよ、その絃の音は
たい弾かるるに任すべきかな。
汝れがさかには消れて失せしも、
汝れが形見は今にのこれり。
そがかすがなる絃の響きは
わが邊に立てる醜のゑみじの
聲と混じらふことのあらんや。

あせたる董に與ふ (シレ)

君がゆかしき眼のごと、
われを仰ぎてゑまひてし
花より色は消ねにけり。
君、たい君に息吹きてし
花より薫り失せにけり
枯れてむなしきその花は

ほしいまゝなるわが胸に
懸りてあれどひやかや、
今もかはらずほの燃ゆる
人のこゝろをわらふめり。

われ泣くともわが涙
よみがへし得じ、歎くとも
ふたゝびわれに息吹かんや。
言はず、うらまぬ運命こそ
われに廻りて來ぬべけれ。

百合の花

(レイ、ハント)

われ等は妙の百合の花、
聖きひかりの花なれや。

神、執りもちて宣ひぬ、
『見よ、わが白き思ひを』と。

さりや、天使がその昔
手にわれ等をば執りてより、

繪にも天使が執りもちて
立てる姿を汝れは見む。

さらにわれ等は花園の

天使の如く見ぬべし。

さりや、黄金の照る夢の
冠を額にかぶるをや。

人あらがらす薫りをば
われ等めぐりて見るを得ば、

さる麗はしきもの執りて
ほの青しとや汝れは見む。

雪の花

(ロビンソン夫人)

100

心もよはき「冬」の子、雪の花、

涙の露をうかべて覺め出で、

かすかなる薫かざりをはなつ。

もろ花の咲き競はぬ

あらはの寒き闇やみながら

美しき玉ぞあらはるゝ。

＊

＊

＊

＊

＊

やさしき花よ、汝なれをし見れば
今もゆかしく、懐かしや。

われも快け樂くなき時をぞ經ぬる。

つめたく、日光をぞ見ぬる、

寒ふき冬をぞおぼわぬる、

はた汝なれがごと泣きもしぬ、畏れもしぬ。

101

月見草 (キーツ)

くさむらなせる月見草、
心は花にあくがれて
はてなかくにまどろみつ、
まどろみのみか、はて終に、
あはれ、たのしき夢に入る。
さはれ、蕾つぼみの音を立て、
花とひらくにおどろきぬ。

人里遠く (バインス)

人里遠く咲き出る
一 薔薇はらばらの木叢むらの美しや、
妹美しや、懐かしや、
二 夕日身にうけ、薔薇はらばらかばふ。

朝露しげきその蕾つぼみ

みやどり葉がくれ清かりや、

いや清かりや、その蔭に

昨夜、愛男いとこのせし誓ひ。

棘とげいとしげき荒蔭あらかげの

三

いや麗うるははしや、憂うれき人生路にんじろの

たどろの下の戀の花。

紅薔薇べにばらゆかし、麗うるははしや、

四

我妹わが妹かひなに凭たよるあらば

荒野、荒海もわが領よ、

わが世願よのねがはず、あざけらず、

世の哀樂もよそに見むかな。

水仙草 (クレーマー)

朝、われ、牧のほこりなる
水仙草の川土手に
咲き匂へるを見たりけり。
影、しろがねの波の上にな。
映りて、咲くに似たるかな。
ひるの暑さに堪へかねて
花のさかりは衰へつ、

水かなしげに流れ去る。
夕、その光榮は盡きはてゝ
さきの姿ぞなかりける。

○ (エリザ、ケーク)

見渡せ、渡せ、

影は満ちたり、

森は黄ばめる

衣を着けたり、

柳はくらくらう

あざけり揺ぎ、

皺よりそめし

思へばげにや

花顔に似たり、

燕も檐に

夏も行くなり、

なながくは在らじ、

さはれ、秋葉の

色数むよりも、

野の薔薇咲くを

見むこそよけれ。

雛菊に與ふ

(カチーグチース)

われ若うして、高き激しき
胸の快樂のなきことあれば、
安からざればいよゝ喜び、
岩より岩に、丘より丘に
われ行きにしを、今や然らず、
わが歡喜をわれとつくりて、
わが渴きをば到るところの

細流の水にわれと霑ほし、
いましゆかしの雛菊よりぞ
「自然」の愛をわれは得るかな。

冬、その髪に霜を添うれば、
いましが額に榮えもあらざる
花の冠をただかぶらしめ、
春微風を放ちて、雲を
分ち、いましに日光をそゝぐ。
いましが領はひろき夏野ぞ。

あふ、かなしげの者なる秋は、
雨にうたれていと乱るゝ
いましが紅き頭を見てぞ
あら、たのしげにひとり興する。

鄙^びの踊^まりの姿をかしき
少女^{をこ}の群^ぐれのさまさながらに、
野^の旅^り人^にいまし會^あ釋^{しやく}す、
若^わしよき言葉得^えなばよろこべ、
さげすまれんもそれなかくに

驚^{おど}かさるゝこともなければ
煩^{わづ}らはさるゝこともなからむ。
さ^さもあれ、獨^{ひとり}り遠^{とほ}き野^の路^ぢにて、
快^た樂^{らく}の思^{おも}ひふと得^えし如^{ごと}く、
わ^われはいましに相逢^あはんかな。

人も通^{とほ}はぬ所に咲^さける
董^{たう}の花^{はな}はこゝろ浮^うきたる
そよ吹^ふく風^{かぜ}の擇^えるに任^ませよ。
あゝ雨^{あめ}、露^{つゆ}の真^ま珠^{たま}ぬきたる

花 薔 薇 を して 跨らしめよや。
いまし 大望の 心も たねど、
いまし 譽れの 名をば 得ずして。
むなし く 朽つる 宿世に あらず。
げに や、いまし は、げに や、いまし は
詩人の 愛づる 愛兒なる なり。

もし それ、詩人 雨をば 避けて
岩に 凭り 添ひ、ある は 四月の
晴れたる 晝の 暑き 日光に

閉ぢこめられて 緑いと 濃き
冬 青の 蔭に 伏して ありしが、
つひに 疲れし 足曳き ずりて
出で なんと して 其處に はしなく、
親しき 友の 立てる が 如く、
いまし の 咲く を 見出で しとき の
詩人の よろこび そも 如何 ならむ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

あした、清しき 日のみ 光を

あらはに浴びていとどいましてが
たいたのしげに立てるを看ては、
嬉しき花よ、わがたましひも
よそごとならず思ひ喜び、
黄昏、露のたもきに堪へず、
泥にまみれてなほもいましてが
こゝろ安げのさまをば看ては、
うき煩ひにとちたる胸の
やすらひしことそも幾度ぞ。

白薔薇

(サラ、スミス)

婚禮のねうに摘まれし白薔薇や。
花の色見るだに著し。
眼り行く露にさしそふ
夏の夜の月より清し。
咲いて枯るゝも、ありがたき
太息もらさず姉妹花の
この夜一夜の運命ぞと

そばを離れし花なれや。
一一八

婚禮のわうに摘まれし白薔薇や。
あまれては花環を飾る。
そを挿頭す人ごゝろより
白薔薇ぞはるかに淨き。
さはれ、鴈たく眼は匂ひ、
珊瑚の唇のうるはしく、
見るもの眼をば見張れども
底の秘めごと問はぬかな。

婚禮のわうに摘まれし白薔薇や。
千々の灯は燃え輝きて、
聖き言ひいきわたりつ、
あだし人、忠實ならぬ人、
かたみに聽きて心なき
誓ひかたみに答ふれど
をのこの受けしその花環
愛でられやがて棄て去らる。

婚禮ウケヒのわうに揃ツまれし白薔薇シロハナや。

神壇カミべの若わかき「愛」こそ

破約ウラヒをなげき悲しめ。

眞夏マナツの薔薇ハナは淨きよくして

挿頭カサし、女等メノに似にざりけり。

花はなこそ褪あせね、幸さいくあれ、

匂におひ、たゆたひ迷まふかな。

ふる里 (コールリッヂ)

わがふる里のいほ低く、

高たかき薔薇ハナの花たわゝ、

居間イマの窓マダべに咲さきこぼる。

もの静しずかなる日ひざかりや、

ゆふべや、はやき曙あけぼのや、

かすけき海のたど聽きこゆ。

はれたる空そらにマートルの

花 咲きみだれ、門のべに
茉莉こまかに枝かはす。
あたりの眺望ちさけれど
みどり野清く、森しげく
見るだに眼のすゞしさよ。
あゝ「隠遁の谷」とこそ
呼ぶにふさへるふる里や。

花に與ふ

(作者不詳)

今こそ地は明けわたれ、
萌ね出でよ、やさしき花よ。
出生あやしき汝れが上に
眼をとめて訝かり見てむ。
照るや光の戀し男と
咲き出でよ、やさしき花よ。

雨やそゝがむ、風吹かむ、
あゝ、夜や汝れを愛づらむ。

汝が葉のみどり失せにけり、
うつろへよ、やさしき花よ。

色香は人にをしまれぬ、
休むべき時ぞ今なる。

さすや日影もうら寒し、
死に行けよ、やさしき花よ。

あはれ、愁ひも盡きにけり、
汝がわざもすべて果てたり。

御空に高うのぼれども、
天つ日の光もくらし。
汝が身に似たる人の身や
生存ひて愛して死ぬか。

春 靜

(ワラランド)

おゝ、暗き墓にな埋めそ。
みどり濃き地にな埋めそ。
たぐつきに埋めらるべくば、
ふか草にわれこそ寝ねめ。

笛の音の遠くひいて、
春の雲彩を曳きつゝ、

空高うのぼり行くとき、
草、花にわれこそ寝ねめ。

月見草

(ハンター夫人)

入る日なごりの夕影が
うれしき光とり去りて、
遠く景色を封すとき、
さびしき谷にわけ入れば
花ほの白き月見草
夕星うけて咲き匂ふ。

やさしく、憂げの花、汝れに
あはれみ垂れて寄り見れば
あはれ、揺曳く影は消ね、
あはれ、天地の間に失せ、
はて天地の間に沈むなる。
墓の底にぞ沈むなる。
汝がへに坐り思へらく、
人の息吹の絶ゆるとき、
失する生命の魔力、何。

あはれ、老いての荷はいかで
願望を繋ぎとめ得んや、
あはれ、死の矢を指し得んや。

いな、いつくしむもの等より
別るゝだにも胸裂けむ。
その悲痛を救ふにも
名なし理由こそうるさけれ、
汝がごご蔭に希望甦き
墓のうちにて咲き匂ふ。

花薔薇 (コーレルリッヂ)

園生のほこり、妙に咲く
こと花々をわれ摘みつ、
薔薇のうてなの底深く
眠れる「戀」をうかいひぬ。
その額めぐり七彩の
かゞやくかむり懸りつゝ、

露に酔ひたるその頬は
ひた紫にひかるかな。

薫るやすみを破らじと

浄き静かに「戀」をとり上げて、

花もろともにと置きぬ。

はかられたりと氣も付かず、
妙たのとりこは目を覺さし、

遁のがれ去らんともがきつゝ
妖あやしき足をあしずりぬ。

うつゝともなき光景なげにぞ

あはれ、嬉しと雄を叫なびて

快樂けらくに堪へず羽はばたきぬ。

かくて叫なびぬ。何かそも
この玉座みくらをばかく魅みせる。



花
の
詩
完

ベ
ス
ス
は
他
處
に
「戀」
を
得
よ
め
。
わ
れ
こ
そ
此
處
を
領
じ
て
め
。

低唱

芙蓉怨

くゆるや、香の煙ゆるく、
 この日あらたに挿みたる
 瓶の芙蓉にたいようて、
 妹がまぼろしなかくに
 見わたらみぞ湧き出づる、
 うれしと見しもしばしにて。

野の花かれてうすき香に
春を夢みる蝶のごと、
昔を戀へど、ひな鳥の
時^{とき}に親を待つがごと、
あやなく空をながむれど
われに希望^{のぞみ}のかへらんや。
くれなるの
瓣^{はな}すき透^{とほ}ほる花ごとに

朝日ほのかに匂ふとき、
窓の芙蓉に立ちそひて、
そが露うけて臙脂^{ようじ}さきし
こゝらの秋のありにしを。

あさみどり、
水滴^{たみ}らんやは莖^{かき}を
夕^{ゆふ}月^{つき}あはく廻^{まわ}るさき、
萌^もゆる芙蓉の葉をわしと、
水^{みづ}そゝぎてはつちかひし

こゝらの春のありにしを。

この秋の夕ゆふとり出でつ。

色さながらにむらさきの

たほひのきぬをとり去れば、

亂るゝ涙雨のごと

絃ひびにかすけき韻ひびあり。

思はつきじ、眼を閉ぢて

小ちさき心のふたがりつ、

うたふは妹いもがふるひつゝ、

血ち汐しほ冷ひね行く胸むねの上に

わが手をとりにて辛からうじて

いまはの床とこにかきし歌。

低ひくかすけく、かすけく低ひく、

調しらべもあらず、うたひつゝ、

搔かいならしては搔かいみだす

わが雄おとこ力ちからにねも堪へで、

きれてうらみのいと長う、
瘦せしかひなに纏ひけり。

花の林にむらさきの
はたくれなるの玉の雨、
降るも出でじないひしらぬ
最後のひゃき、久方の
天つ御園にやすらひて
妹よ、あはれと聴くらんか。

妹が眼に、
やどる命の露に似し
星うるはしう輝きて、
更けにし空にまたゝきつ。
あはれ、まぼろし浮べたる
香の煙は消え失せて
ゆらぐや、瓶に匂ふ花。

花の怨

こゝろなう
ながむる庭の秋さびて、
のこる命を石に凭る
秋海棠や、色あせて
息吹に堪へぬすがたかな。
かゝるをば

運命とはいへ、その花を
あゝ、見過ごすに忍びんや。
肥ねたる土を鉢に盛り
うつし移るしをなかくに

葉も落ちつ、
瓣もしほれつ、やがて又
根の末までも枯れ果てつ。
かけしなさけの思はじな、
花の怨を負へるかな。

落花

鬢びんのほつれを搔かきあげて
指ゆびにふれたる花はなびらよ、
くれなる、夢ゆめとさめはて、
あゝ、寂さびびたりな、天あめと地ち。
戀こひあとなきになほまさる、
香か爐ろの灰ひの冷ひわたるも

あはれ、花はなびら手にのせて
涙なみだそゝぐを誰たれか知る。

つらや、「春はる行く今日けふの香かよ、
さらば。」とちかふ玉たま琴ことの
うすれ行く音ねをいたづらに
袖そでに掩おほほひて泣なみだかんな。

白芙蓉

入日の名ごりか、淡紅の匂ひ、
 ほのかに芙蓉の花をそめて
 たちまち真籬の外に消ねぬ。
 似たりき、舞ひぶり妙の姫の
 紅袖ひらめき映ゆる顔に
 今その芙蓉ぞ闇に白き。

灯をだに呼ばゝす窓に寄りて
 玉をも欺く花のひとつ、
 摘みとり今更ふるふ胸や。

さびしきこの夕いねもわびて、
 空しくかすけき星を仰ぎ、
 主なき小琴に音をぞしのぶ。

行春

あゝ、とこしへの花ならじ。
胡蝶の夢を載せて散る。
鐘聲二つ三つ夕雲の
音もかすか、
寺いづら、

清きかをりのまた凝りて
天の光の野に咲かむ
時はありとも。
心なや、
春の行く。

星と花

神がはじめて天地を
創造り了へてしその日かな。
星と花とはあらねども
虹うるはしう輝きて
万象のみなそこに定りぬ。
神、夕空の虹に立ち

天と地とを見渡しぬ。
さにはれ、二つを結びたる
絃に妙なる詩なきを
さびしとこそは思したれ。

詩人はこゝに生れ出ぬ。
神みづからの肉そぎて、
神みづからの魂こめて、
つくりに給ひしものぞ彼れ。
あゝ、聖きかな、高きかな。

父なる神のみことにぞ、
萬象の天地にゆるぐまで
詩人うたをばうたひつゝ、
仰いで涙そゝぎけり、
俯して血汐をたらしけり。

そゝぎし涙星とこそ、
たらしゝ血汐花とこそ、
凝りて天地華やぎぬ。

虹の七彩いや榮はぬ。
神のみこゝろ安らひぬ。

さりや、これよりとこしへに
静けき風の吹きかひて
詩のしらべに通ふとき、
星の光は地に照り、
花のかをりは天に入る。

野菊

た
ら
ち
ね
の
や
は
胸
に
ゑ
み
を
印
し
つ
ゝ
面
う
め
て
な
が
し
め
に
挿
頭
な
る
な
れ
を
見
つ
ら
む
昔
遠
し。

お
ゝ
野
菊
な
れ
に
こ
そ
わ
が
い
は
け
な
き
夢
は
籠
れ
悔
あ
る
身
の
野
べ
に
立
ち
思
ひ
あ
ま
り
て
ひ
と
り
摘
む
よ。

川原の秋

川原の秋老いて、
鶴の影もあらず、
夕日黄に、蛇籠あらず。

水行いて停まらず、
瀬に立つ石は瘦せてぞ咽ぶ。
あゝ、詩人臨終の歌に似ずや。

花蓼のくれなるを摘み、
あゆるかひなの血にもたぢず、
柳に寄りて瀬にこそ投ぐれ。

柳の葉散りて、散りて、散りつくして、
夕日黄に、黄に、
石ただ咽ぶ。

梅の小家

竹の根あらふ小川の
岩いく度か、踏み越へて、
苔にわが印す足跡を
見かへりつゝ、ぞひとり行く。

徑きはまりて小家あり、
花真白なる梅が枝を

籬に擬すればよろほへる
幹はとざゝぬ柴戸か。

春を尋ねてさまよひの
香をなつかしき入りしかど、
思ひかけじな、簾陰には。
梅の小家のあらじとは。

もる日の光ほのあかき
窓にまばらの梅の影。

訂^た聽^きけ、少^な女^め子^この書^か讀^よむを、

書^か讀^よむ聲^{こゑ}をよく聽^きけば
都^{みやこ}も聖^{きよ}きあさぼらけ、
花^{はな}召^めせとのみねびやかに
呼^よび行く少^な女^めさながらよ。
朝^{あさ}ごと花^{はな}を市^{いち}に賣^うり、
夕^{ゆふ}ごと書^かを家^{いえ}に讀^よむ、

幾^い少^な女^めゆかしと思^{おも}ひつゝ、
春^{はる}秋^{あき}や、過^すすべき。

花賣る子

「花を召せ、」
「花を召せ、」
月ありあけの門に呼ぶ。

市の人、
利に固し、
花の一枝を買ふは稀れ。

年聞けば、
手をかさぬ。
おゝ、重げなり、花の籠。

「父やある、」
「母やある、」
問へば涙を垂るゝなり。
涙にぞ、

あ 花 凋^しほ^る。
あ、凋^しほ^れし花を^買へよ、君。

まぼろし

物^のに^おそ^れて^野鼠^の、
散^らば^ふ罌^粟の^花が^くれ、
う^かい^ふ心^ある^がこ^と、
さ^りや、茨^の亂^れ咲^く、
く^さむ^ら深^うひ^そみ^つ、
日^ごこ^に建^ちぞ^殖う^るな^る
た^くつ^き寒^き石^數む^に

などをのゝきのなかからでや。

月や、出づらむ、いや薫る

ほの青白き花はな茨あざ、

(面おもてに亡なき人の魂たまや、浮うく)

額ぬかに手をあてわれとわが、

わがまぼろしをそこに看みき。

灰はいと冷ひねつる歌うた卷まきを

くづさじとこそ喘あせぐなる

わがまぼろしをそこに看みき。

君よ

君よ、おゝ、君よ、

巖いわをなでゝ、何を忍しのむや。

さりや、朽くちんか、

一莖ひとこぎの草くさとなりも得えざらむに、

忘れらるべき名なだもなにかむらに、

あはれ、後裔あとぢなほ弔とらふを恥はぢとせむに。

君よ、お、君よ、
むしろ徐かに足をあげて
摧けて薫する葦花をゆるせ、
むしろ、むしろ去つて、
われとおくつき飾るべく
などては薔薇を集めざるや。

野菊

暗薫の身にや、そゝぐと
見まはせばわれたひひとり、
星かどぞ野菊咲く野の
夢ならず、石に倚りたり。
思へらく睫毛になほも
玉なして涙や、かゝる、

かぎろひのほのめく影は
わが戀ふる少女のそれよ。

あゝ、野菊、追憶の花よ。
あゝ、野菊、希望の花よ。
ひとしきり、野菊ゆらげば
天地は月の領なり。

夕野

夕づゝの
光にひかれあしなみも
ゆるく思に沈みつゝ、
若人ひとりに歸り行く。

菜の花がくれ、ひとすぢの
里川ほそく糸のごと、

夕べを縫うてしづかなり、
村はかすみに包まれて。

畦路に
うちたきて若人は
聞く歌のひとふしに
耳傾けて佇みぬ。

やさしき聲はいづこより
来るとも知らず「思やんせ、

月にむら雲、花に風、
ほんに浮世はまゝならぬ……」

空、夕づゝはまたゝきつ。
かの若人はくづをれて
菫花の床の香に伏しつ。

憂きなき天をたゝへつゝ、
この世はるかに見おろして

飛びし雲雀の影もなく、
見渡すかぎりたそがるゝ。

むらさきの
堇花の中のひと
眞白きそれをか
つきぬ涙をそゝ
ぐかな。

あつき涙にねも堪へで、
うちしをれたる堇草、

そのひとを擲てば
水は音なく浮けて行く。

若き愁

夜はあけぼの、神の座に
妙なる花や、爐に燃ゆる、
雲むらさきに、煙りつゝ、
匂ふくれなる野に照りぬ。

草籠たきてかの少女
蝶を夢よりさましつゝ、

今日もはやくぞ刈りそめぬ、

草刈る少女年十五、
鎌の双青き香に、
ゑめる面わをわれと見て
行く人看むの氣づかひに
はちらふ容のらふたしや。
むら濃の纏ゆるうして
蝶のたはるに任せつゝ。

ゑみては歌ふひな唄の
しらべをうけて野の花は
瓣ほのかにもふるふかな。
玉ぬく露のかつ散りて
虹の七色みだるれば、
足元のうるほす水さら
琥珀をさいて流れ行く。

草葉がくれに咲く花を
あはや刈りて湧き出る

若き愁のなからでや、
涙を眠に浮べつゝ、
しをれ行く花見守りつ。
無心の唄はこの日より
あゝ、とこしへに寂びにける哉。

『低唱をはり』

花の詩完

花語彙

苧ひび

Amaranth.

不朽。不變の愛。

秋牡丹

Anemone.

疾病。期望。

林檎

Apple.

誘惑。

林檎の花

Apple Blossom.

寧望。

山秦皮とんこ

Ash, Mountain.

謹慎。

秦皮の木

Ash Tree.

壯大。

白楊はくよう

Aspen Tree.

悲愁。恐怖。

バーム

Balm.

同情。

羅勒	月桂葉	月桂樹	月桂冠	栲樹	赤楊	エニシダ	日本紅椿	白椿	シーダ
Basil.	Bay Leaf.	Bay Tree.	Bay Wreath.	Beech Tree.	Birch.	Broom.	Camellia Japonica, Red.	Camellia, White.	Cedar.
憎惡。	死すとも變らじ。	光榮。	勳功の褒賞。	隆盛。	柔和。	謙遜。清楚。	秀絶。	可憐。	力。

シーダの葉	白櫻樹	櫻花	紅菊	白菊	黃菊
Cedar Leaf.	Cherry Tree, White.	Cherry Blossom.	Chrysanthemum, Red.	”	”
われは君ゆへに 生く。	善良の教 育。	不實。	われは愛 す。	真理。	なほさ りの愛。

四葉オランダゲンゲ

Clover, Four-leaved.

わがものたれ。

紅オランダゲンゲ

Clover, Red.

勤勉。

白オランダゲンゲ

Clover, White.

われを思へ。

約束。

クリンザクラ

Cowslip.

憂慮。青春の美。

タガラシ

Cress.

力。恒心。

サフラン

Crocus.

短氣。欺く勿れ。

毛茛うまのむしぐた

Crowfoot.

忘恩。

水仙

Daffodil.

尊敬。ならぬ愛。

天竺牡丹

Dahlia.

輕浮。華飾。

雛菊

Daisy.

無心と希望。

園雛菊

Garden.

われ君と哀樂

を共にす。

WILD.

われ一考せん。

野雛菊

Elder.

熱心。

接骨木

Elm.

威嚴。

椴

Fir.

時。

瑠璃草

Forget-me-not.

忘るゝ勿れ。

龍膽

Gentian.

われ君の悲めるを

愛す。

野葡萄

Grape, Wild. 仁慈。

山楂

Hawthorn. 希望。

榛樹

Hazel. 和睦。

ヒース

Heath. 幽寂。孤獨。

冬青

Holly. 先見。

金銀花

Honeysuckle. 寛大、歸依の情愛。

風信子

Hyacinth. 遊戯。

紫風信子

” Purple. われ悲む。

白風信子

” White. はぢかむ可愛

らしき。

燕子花

Iris. 音信。

常春藤

Ivy. 友情。結婚。忠信。

茉莉

Jasmine. 可憐。

桂

Laurel. 光榮。

山桂

Laurel, Mountain. 大望。

ラベンダー

Lavender. 不信。

野紫丁香花

Lilac, Field. 謙遜。

紫紫丁香花

” Purple. 初戀の心。

白紫丁香花

” White. 青春の歡喜。

みかど百合 Lily, Imperial. 威嚴。
 白百合 „ White. 清淨。無垢。
 谷百合 „ of the Valley. 幸福の復歸。
 菩提樹 Linden. 夫婦の愛。
 蓮 Lotus. 安靜。
 蓮花 „ Flower. 真面目の愛。
 蓮葉 „ Leaf. 背言。
 錦葵 Mallov. 溫和。
 楓 Maple. 遠慮。謹慎。
 金盞草 Marigold. 悲哀。

薄荷 Mint. 德。
 寄生木 Mistletoe. 不屈不撓。
 朝顔 Morning Glory. 矯飾。
 苔 Moss. 母の愛。
 マートル Myrtle. 愛。
 樅の葉 Oak Leaves. 勇敢。
 樅樹 Oak Tree. 厚遇。
 白樺 Oak, White. 獨立。
 阿列布 Olive. 平和。
 橙花 Orange Blossoms. 貞淑。

橙樹

Orange Tree. 寛大。

棕櫚

Palm. 勝利。

三色堇

Pansy. 思。

桃花

Peach Blossom. われは君の俘
虜たり。

梨

Pear. 愛情。

梨樹

Pear Tree. 愉樂。

牡丹

Peony. 羞恥。

瑠璃紫萼

Pimpernel. 變節。

松

Pine. 憐憫

鳳梨

Pine-apple. 君は全たし。

石竹

Pink. 大膽。

眞紅石竹

” Carnation. 女の愛。

山石竹

” Mountain. 向上。

八重紅石竹

” Red Double. 純潔にして
熱心の愛。

一重石竹

” Single. 純潔の愛。

白石竹

Pink, White. 智慧。

梅樹

Plum Tree. 忠實。貞節。

野梅

Plum, Wild. 獨立自營。

紅罌粟 Poppy, Red. 慰藉。
 白罌粟 " White. 睡眠。
 櫻草 Primrose. 早生と悲愁。
 月見草 Primrose, Evening. 不定。無常。
 蘆 Reed. 音樂。慇懃。
 深紅薔薇 Rose, Deep Red. 羞恥。
 犬薔薇 " Dog. 愛、苦、樂。
 紅薔薇 " Red. 愛。
 棘無薔薇 " Thornless. 初戀。
 白薔薇 " White. われは君を敬ふ。

黃薔薇 " Yellow. やぶれし愛。嫉妬。

源平薔薇 " York & Lancaster. 戰。

滿開の薔薇の下に " Full-blown, placed

二の蕾を入れたる over two Buds. 秘密。

紅白の薔薇を合したる " White & Red together. 和合。

薔薇の冠 Roses, Clown of. 徳行の褒賞。

紅薔薇の蕾 Rosebud, Red. 純潔可憐。

白薔薇蕾 Rosebud, White. 少女らしき。

薔薇の葉 Rose Leaf. 君望み得ん。

迷迭香	Rosemary.	追憶。
燈心草	Rush.	順良。
ユキノハナ	Snowdrop.	希望。
向日葵	Sunflower.	倨傲。
赤鬱金香	Tulip, Red.	愛の宣言。
マダラ鬱金香	” Variegated.	美目。
黄鬱金香	” Yellow.	希望なき愛。
鬱金香	Tulip.	仁慈。
葡萄	Vine.	熱狂。
青堇	Violet, Blue.	忠實。

女堇	” Dame.	用心深き。
優堇	” Sweet.	温順。
黄堇	” Yellow.	田園の幸福。
川柳	Willow, Water.	自由。
しだり柳	” Weeping.	幽愁。
忍冬	Woodbine.	兄弟の愛。
水松	Yew.	悲哀。

花語彙完



春は晴、やうく、白くなりゆく。山際すこしあかりて、紫
だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月のころはさ
らなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへ
をかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山際いと近く
なりたるに、鳥のれどころへゆくとして、三つ四つ二つな
ど飛びいくさへあはれなり。まいて鷹などのつられた
るが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風
のおと、蟲のれなど、いとあはれなり。冬は雪の降りたる
は、いふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでも
いと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつ
きくし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭室火
櫃の火も、白き灰がちになりぬるはわるし。

花問答

われ君を愛す……………紅 薔 薇
われ君を愛す、苦樂は懸つて君が
一身にあり……………犬 薔 薇
われ窃に君を愛す……………紅白の薔薇
われ哀樂を君と同うす……………園 雛 菊
君が望は達せん……………野 雛 菊
言ひ出でよ……………黄花クリンザクラ
君が望は達せん……………雪 の 花

われ悲し……………紫風信子
 われ哀樂を君と同うす……………八重エゾギク
 君われを愛するや……………鶏冠花
 われ君ゆるるに生く……………杉類の葉
 われ君を愛せず……………薔薇の萼より花を
 ……………もぎとりて投げ棄つ
 わが友情を捧ぐ……………常春藤の葉枝
 われを忘れんとせよ……………月草
 われを思ひ出でよ……………忘れな草(瑠璃草)
 われと共に歡べよ……………カハヤナギ

わが兄弟的(又姉妹的)同情を保有
 せよ……………山梅花
 無意義のことを言ふ勿れ……………わ
 れ君を痴愚の人と思はん……………紫ヲダマキ又は柘
 ……………榴花
 わが月下氷人たれ……………サフラン
 われは君に對して怒れり……………ハリエニシダ
 今君を思ひ出しぬ……………エゾギク
 再思ぞよき……………エゾギク
 われもそれに同意す……………藁

われは思ひ過ぎたり……………紅ヲダマキ
 われに會見を許すや……………ルリハコベ
 それほどまでも……………落葉松カラマツの小枝
 わがものたれ……………四葉オランダゲンゲ
 氣をつけよ……………爽竹桃屬
 われ美しと云ふ勿れ……………單一の薔薇
 君は大言す……………紫陽アサギ花
 歡べ……………黄サフラン束
 そは危険なる娛みなり……………月下香
 恐れざれ……………ヤマナラシの葉

四

君は危険にあり……………石シヤクナ南
 停れ……………待て……………蘭アサギ草
 去れよ……………蒲公英の飛花
 そは難し……………コスモ、
 君を蔑視す……………芸香又は黄花の
 ………………オランダ石竹
 君は家庭の妻たらんと欲するや……………亞麻アサと金銀花
 われは君を疑ふ……………杏コウの花
 われは君を羨む……………懸駒ケイコ子
 われは君を待つ……………秋牡丹

五

われは君の成功を希ふ……………巴旦杏の花と榭ツタ

……………の葉

われ等と晝餐を共にせよ……………柏の葉

われは君が捕虜たり……………桃の花

静かなれ……………白薔薇

われ君に反対す……………野生ヨモギ菊

われは再び愛情の歸り來らんこと

を希ふ……………長キヌ壽キ花セン

われは君の厚遇を感ず……………亞麻

われは君に感謝す……………薄荷

われに接吻せよ……………寄キ生ド木キ

いそげよ……………黄鳳仙花

いざ爲せよ……………午莠の葉

われは獨立獨行す……………薊

君は顔る弱し……………天竺牡丹

われ嫉ましく感ず……………金盞草

君嫉ましと思ふや……………黄薔薇

幸福なれ……………スイバの類

約束を守れよ……………ツクバネ朝顔屬

われ如何にかすべき……………白楊

われ君を愛す……………マートル
 われは見棄てられたり……………柳
 いそげ……………石竹屬
 よろこべ……………酢漿草
 わが怨恨は君に随つて墓底にも至
 らむ……………シヤグマユリと
 ……迷迭香
 われを思ひ出でよ……………迷迭香
 われと婚せよ……………米産菩提樹
 君は頗るさかし……………女萎

友たれよ……………榛樹の小枝
 争をやめむ……………榛の實
 われ君を許す……………女貞の小枝
 わが爲めに祈れ……………白馬鞭草
 君やがて婚するに至るべきを預言す
 ……天竺牡丹、忍冬と
 ……コスモ、
 恥ぢて……………牡丹
 われ等は別れざる可からず……………茉莉
 われは君の愛を欲せず……………山蘿、荷

われを忘れんとせよ……………ハナ陰地ラビ蕨
 ありがたう……………キン龍牙ツヒキ草
 君はわれを驚かす……………マツ松露
 わが同情を受けよ……………ババーム
 われは君を思はん……………サン三色堇
 われに眞實を語れよ……………ハク白菊
 氣を付けよ……………メグ女薔薇
 君われと共に舞踏するや……………フキ白風信子
 われ死すとも變らじ……………ツキ月桂の葉
 さらばよ、されどわれをば忘るゝ

こと勿れ……………ムシむしりたる花と
 ………………サン三色堇
 わが憂慮を安んぜよ……………クリクリスマス薔薇
 われは君が悲しめるを最も愛らし
 と思ふ……………リン龍膽タマ膽
 彼れ偉大善良なりとの世評なり……………リン林檎の花

花問答完

明治三十九年三月一日印刷
明治三十九年三月四日發行

花の詩奧附

定價金五拾錢

著者 小原無絃

發行者 吉田正太郎

印刷人 今井鐵次郎

發行所 本郷書院

印刷所 今井活版所

不許複製

賣捌

東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、東海堂、北隆館、良明堂、大阪吉岡、杉本書店、久留米菊、竹、名古屋屋川瀨、星野文星堂、其他各書林

與謝野鐵幹君 合著
 上野 敏君 序
 馬場 孤蝶君 跋
 藤島 武二君 畫
 内海 瀧君 序
 月林君 序
 泣菫君 跋

毒草

四六大方形美本 紙數百參餘 特
 製(表紙グロス製)定價金七拾
 錢 洋裝並製金五拾錢 郵稅各金六
 錢 市内小包料五錢 製本既成
 この夫妻の新しき詩文集を「毒草」と
 云ふ。知らず、讀む人をして酔はしむ
 るや、睡らしむるや。躍りたしむる
 や。唯見る、紅紫の花月もあやに、
 香蒸すばかり、蒸りぬ。初版早々、
 増補訂正第三版を出だせり。

押川春浪先生著

世界少年冒險譚

定價金三十錢
 郵稅金四錢

月が黒いか、風が白いか、奇雨靈風慘
 として人目を暈せしむもの、是れ冒
 險譚の特色にあらずや。押川春浪先
 生は、現代冒險譚作者の白眉也。天矯
 離奇の筆を提けて、蕩目の景に赴く
 や。黒汁淋漓として、牛鬼狐精皆躍る
 の感あり。此篇、先生が得意の作を蒐
 めて一卷となせるもの、寔に一代の
 珍となすに足れり。其筆や奇、其文や
 快。明窓机の下執つて之を讀めば、
 佛として篇中の人となるが如し。鬼
 が出るか、蛇が出るか請ふ此の作に
 就いて之を徴せとこそ。

新詩 山川登美子君 合第
社 増田まさ子君 二
同 與謝野晶子君 作
人 版

戀ごもろも

中澤弘光君書

山川登美子、増田雅子、與謝野晶子の三女史は、多年新詩社の編輯者として、詩名夙く、星の紙上に顯れ、近時我國短詩壇の紙上實に女史者切力多きなる由は、實にわが書院の毒草に由りて、此集を著たり。山川登美子の二女史は、此集を著たり。増田雅子の二女史は、此集を著たり。與謝野晶子の二女史は、此集を著たり。未だ口稱を以て詩才を窺ふべし、その詩才を窺ふべし。讀者の口に當り、歌美を指す。未だ口稱を以て詩才を窺ふべし。讀者の口に當り、歌美を指す。未だ口稱を以て詩才を窺ふべし。讀者の口に當り、歌美を指す。

みだり髪型美本○紙數三百三十頁○前印刷月
二十月中旬出版○壹冊定價金拾四錢○郵稅四錢

發兌元 東東市京 本本區 院書鄉本

大學教授 芳賀矢一先生校訂
大學助教授 藤岡作太郎先生序文
文學士 佐藤芝峰先生著

小倉百首評釋

定價金四拾錢
郵便稅四錢

小倉百首一度出でしより、愛に幾百
歳、竜田吉野の花紅葉、宛として机上
一冊に句ふの觀あり。文學士芝峰君
優麗婉婉の筆を以て之を釋し、英獨
兩譯を加へて批言最も適當を推す。
文の妙、評の巧、現時の文界多其例
を見ざる所也。和歌を嗜むの士、語
學を修むるの、焉んぞ此書を閱さ
ずして可ならんや。冒頭添ふる所の
總論一篇、最も著者の識見を伺ふに
足る。幸に一讀を玉へ。

東洋女學校 講師 高橋菊衛
愛國女學校 講師 櫻井岩衛
三輪田女學校 講師 櫻井岩衛
日本女學校 講師 櫻井岩衛
合著

實用裁縫書普通部

定價參拾五錢 郵稅六錢
壹册百六拾頁、折圖七枚
其他大小插圖百八十餘種

實用裁縫書高等部

本書は多年斯道の教授に從事して技
術の合著に於いて、高等女學校等
の教科書參照として、最も適當なる
みならず、家庭修業の上にも、良
なる參考書なり。殊に本書は、從
流布する此種著書に比し、材料に
豊富なる、挿圖を以て、精密なる
多量の挿圖を以て、精密なる、挿
ふ。斯道の本を研究せんとすれば、
一本を購讀して、参考に供し給へ
ば、女に請はせらる。

井上飢花坊序及閱
巖 郷右衛門編

やなぎだる

定價金廿二錢
郵税金二錢

簡勁にして深く人情に入り滑稽にし
て直に社會を描き美感を人に興ふる
は即新川柳の生命なり
輕佻、浮薄、怠惰の社會を諷刺罵倒す
るは之れ新川柳の赤心なり幸に新川
柳の趣味に通ぜんと欲するものは必
ず「やなぎだる」を一讀せざるべから
ず
初版旬日賣切再版

文學士 小原無茲先生譯

西吟新譯

近刻

本書は西歐詩星○ウチナーヅウチー
○スコット○フレチャヤー○ヒーマン
ス夫人○カメル○ヘリツク○ハイロ
ン○パンス○ゲイ○アラウニング夫
人○ローガン○ロンゲフェロー○ユ
ーゴー○テニソン等の名吟玉詠を小
原文學士の彩筆を以て新詩型に譯せ
しもの也、西歐文學の精華を味はん
とするの士は須く一本を座右に供へ
ざるべからず

本郷書院出版目錄

文學士 尾上柴舟著
柴崎恒信畫

金

帆

定價金四十錢
郵税四錢

先生は温順快活の人、其詩また流麗曲雅、當今佶屈
贅牙澁怪奇を以て詩の能事とする風潮の中に起つて
恰も熱砂の中を近く一筋の清流のことくすらくと
したる風趣を以て一種獨特の新聲を試みたる此書收
むる處四行詩、長詩、譯詩數十篇皆雋秀瑰麗西詩の眞
髓を得て更に一步を進めたるものこれ眞に現今詩壇
の一明星也一曉鐘なり

●初版 忽ち賣切 再版出來

春鳥集

蒲原 有明 著

裝訂意匠 ● 挿畫 ● 青木繁君

定價金十七錢 ● 郵稅六錢

著者の詩は徒らに新奇を
衒ふものにあらず。たゞ
舊慣に甘んじ難きものあ
りて、直に著者が胸裡に
向て、それが餘蘊を絶たむ
とする努力なり、随てま
た懺悔なり。こゝに精苦
の作を試み長短積で漸く
三十有餘篇を成しぬその
多くは尋常敘情詩の陳域
を脱して更に別途に出で
たるものなり。著者はま
た巻頭の自序に於て志す
ところの什一を敍べたり

本郷書院出版目錄

文學士 久保天隨著

評釋 日本絶句選

定價三十錢

郵稅四錢

人を以てすれば四十家、詩を以てすれば百首、菅公
謫居の詠より以上、人口に膾炙する古今の名吟佳什
大抵網羅して剩すなく、加ふるに、評釋の文、流麗
婉美、一講すれば齒牙の香三日失せず。明窓淨凡の
上必ずこの好伴侶なかる可からず、敢て世上才人の
一讀を勸む

本郷書院出版
 文學士 越廼背山著
 時代笑話 **滑稽文學** 定價金廿五錢
 文學士 小原無絃著 郵稅 四錢
 ユーゴーの詩 近刻
 文學士 尾上柴舟著
 森の歌 近刻
 文學士 佐藤芝峯編
 美文韻文 **筆のあと** 附作文大要

本郷書院出版
 文學士 越廼背山著
 時代笑話 **滑稽文學** 定價金廿五錢
 文學士 小原無絃著 郵稅 四錢
 ユーゴーの詩 近刻
 文學士 尾上柴舟著
 森の歌 近刻
 文學士 佐藤芝峯編
 美文韻文 **筆のあと** 附作文大要

文學士 越廼背山著
 文學士 小原無絃著
 文學士 尾上柴舟著
 文學士 佐藤芝峯編
 文學士 渡邊清江 共著
 文學士 渡邊清江 共著

滑稽笑話 定價金廿五錢 郵稅 四錢
 新式の滑稽笑話○著者は文學士と文學士とで共に赤帽の兵隊さんである。話は總て嶄新奇抜で、滑稽笑話願を解くまに／＼人生百般のこと、特に時局に關して、諷刺的訓戒的新趣を漏して居る。紳士淑女諸君是非一本を購つて、新式の滑稽文學を御覽なさい。

初版 忽ち 三版
 賣切

文學士 上田 敏著

詩集 海潮音

定價金壹圓

郵税金八錢

總クローズ製 金文字入 美本

歐洲詩壇最近の思想と聲調とを紹介し之を新體の國詩に移植したるもの、かの莊麗にして婉美なる詞華に奇想幽思を歌ひいでたる象徴詩人の作最も多し。彼邦の評界今なほ之に就いて詳細なる論議に乏しく吾邦の藝苑素より未だ之を傳唱すること無き清新の聲に樂まむとする人よ來てこの集に聽け。

小島鳥水君著

三月十五日發行

鳥水文集

定價未定

豊贍無比の詞藻と、縦横自在の辭句に盛るに、十二分の才氣と、十二分の熱味とを以てするが故に、人の眼に耀やくこと、閃火の如く、心を酔はしむること、醜の如きもの、わが小島鳥水君の文の如きに到りては、實に現人にその匹を求むべからず。今君が多年、文藝、社會、人生、自然等八面にわたりて、感納したるところを詩化せし文章中、最も得意なる作を一巻に輯めて『鳥水文集』といふ。本書を除いて君に文集なし、君の文章の精純は、ひとり本書によりてのみ視ふを得べし、諸君の疲れ、わづらひに惱める人の机畔に、慰藉者として此の著を寫む。

押川春浪君著、尾竹國觀君畫

冒險
小説
怪雲奇星

定價未定

郵稅未定

寸珍美本四百ページタラズ

押川春浪君の奇想妙筆は世すでに定評あり、本書は氏の著作にして、江湖の大喝采を博せしもの七篇を収む、『絶島通信』は何をか通信するか、『海峡の悲劇』を讀んで泣かざる者は男子に非ず、『海國神仙譚』の變幻不可思議なる、『天祐峽』の壯快なる、『秘密國揮檢』の奇妙なる、『土牢の勇士』の勇烈なる、『南極大怪事』の怪異なる、讀者開卷或は肉動き、或は毛髮逆拜に立つの感あらん。